『比較日本文化学研究』第 12 号（2019）

論　文

「女体」論

―― 肉体の敗北が意味するもの ――

李　　慧

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

A Study on Female Body

LI Hui

Abstract: *Female Body*, a short story, was published by Sakaguti anngo in September 1946, and Chasing Love as a sequel of it was published in January of the following year. The sharp contrast between Tanimura's sickness and his wife Motoko's health makes him feel inferior, jealous and powerless, but he cannot change all these. Finally, he chooses to escape the reality. In author's opinion, there is a sense of inferiority, caused by his wife, existing in Tanimura's heart, which is a microcosm of Japanese society in the early postwar period. This paper will focus on above subject to analyze Female Body.

Keywords: female, body, inferiority, early postwar period

はじめに

「女体」は安吾が 1946 年 9 月『文藝春秋』に発表した短編小説であり、翌年の 1947 年 1 月「恋をしに行く」は「女体」の後篇として『新潮』に発表された。生来病弱の夫谷村は自分の弱さと妻素子の健康さとの鮮明な対照から悔しさ、恥じ、嫉妬、無力感を感じるが、結局、そのどうしようもない弱さから逃げるしかできなかった。

この作品に関する研究は貧弱であり、私見の限り花田俊典の研究しかない。花田俊典は、「白痴」「女体」「恋をしに行く」の中の女性像の変化、関連性について検討し、

> 「「白痴」の次なる作品として取り組んだ「女体」において、安吾は当初、素子に「献身」性を付与しておきながら、けっきょくそれを生かしきれず

に素子を白痴の女と同様の「貪婪な情欲」のみの存在としてしまった。それがいま、「女体」から四ヶ月後に発表された「恋をしに行く」に至って、一個の女体を、たとえ特殊な事例で、しかも「幻想」の産物であったかも知れないにしろ、ともかく「爽か」なものとして捉えたのである。」[1]（傍線引用者）

と述べている。花田氏が言う「恋をしに行く」の主人公である素子は「白痴の女」と同様な情欲のみの存在であるという点と、「恋をしに行く」における女主人公の信子のイメージは「爽か」なものであるという点に筆者は賛成できない。筆者は、「女体」にしろ、「恋をしに行く」にしろ、女性像に関連性があったとしても、三作品における女体の存在意味が違う。「白痴の女」は、「貪婪な情欲」のみの存在にいられることで、安吾が言う「ふるさとの住人」になり得た、それはまた安吾の「明日の希望」と繋がる。しかし、「女体」の素子と「恋をしに行く」の信子はむしろ男主人公の谷村を相対化させるために存在している。素子は情欲のみの存在でもなければ、信子は爽やかなものでもない。二人とも情欲の存在であるが、素子から信子までの女体の変化には谷村の心理的な変容が表れていて、谷村が素子の情欲から逃れるために情欲の信子の虜になることは、谷村の最終的な悲劇を示唆する。

筆者は、谷村の内部における素子との勝負による敗北は戦後初期日本の社会の縮図の一つであると考えている。作品はどのように戦後社会を表象するのか、本論で「女体」を中心に分析したい。

一、占領によるトラウマ

1、肉体的な敗北

「女体」全篇は脆弱な谷村が頗る健康な素子に対する恥じ、もがき、嫉妬を描いていると言える。作品の中で、主人公である谷村は、外の男性登場人物である岡本と仁科に嫉妬をしている。岡本は「名声も衰へ生活的に谷村にたよることも多かつた」。谷村はこのような岡本に敵意を持つ。作品は「岡本は谷村夫妻の絵の先生であつた。元々素行のをさまらぬ人ではあつたが、年と共に放埒はつのる一方で、五十をすぎて狂態であつた」[2]という岡本の訪問から始まり、しかも、最初の三つの段落は全部岡本のことについて描いている。このような展開方は作品が岡本を中心に描かれるような錯覚を感じさせるが、物語が発展していくと、岡本を主人公とする方向には発展しないことが

判明する。谷村夫妻の世話を受けていた岡本が谷村夫妻に頼る場合には、岡本は谷村夫妻の口喧嘩の火元になったりする。谷村が岡本をやりこめてしまったことで、素子は谷村にやりかえした。素子のやり返しに対して、谷村は肉体的に反感を持っていた。

「谷村はこのやうな奥歯に物のはさまつた言ひ方に、肉体的な反感をもつ性癖だつた。人に与へる不快の効果を最大限に強めるための術策で、意地悪ると残酷以外の何物でもない。素子はそれを愛情の表現と不可分に使用した。それも亦、一種の肉体の声だつた。」[3]（「女体」）（傍線引用者）

おそらく谷村が岡本に対する嫉妬は妻の性欲にさえ満たせない脆弱な肉体から来たものであろう。岡本には隠し女、隠し子がいたり、女子弟子を口説いたりし、女が多かった。それは谷村を刺激するであろう。

また、作品の中のもう一人の男性人物の仁科に対して、「谷村は常に仁科をやりこめる。その作品を嘲笑する。みぢめな思ひをさせてゐる。そして怒らせて悦に入つてゐる」。仁科は谷村より 10 歳年下であるが、なぜ谷村は年下の若者に対しても岡本と同じ「いじめる」のであろう。それは岡本と仁科とはともに素子に媚びたという態度に由来したものである。しかも、

「仁科の媚態は、谷村の毒舌の結果の如くであつたから、谷村は多くのことを思はずに過してきたのである。岡本の媚態を見るに及んで、谷村には思ひ当ることがあつた。

仁科の媚態は岡本の如く卑しくはなかつた。仁科は弱点をさらけだしてはゐなかつた。身を投げだしてはゐなかつた。元来素子と仁科には十歳以上年齢のひらきがあるから、媚びることに一応の自然さがあつたのである。

精神的に遅鈍な仁科は本来肉感的な男であつた。彼の態度のあらゆるところに遅鈍な肉感が溢れてゐたから、特に一部をとりあげて注意を払つてみることを谷村は気付かずにゐた。仁科の媚態にも、岡本と同じものがあつた。それは素子の肉体に話しかけてゐることだ。」[4]（「女体」）

岡本と仁科は年齢が違うが、素子の肉体に対する関心という点でが共通しており、しかも、それは病弱の谷村には勝てないものである。谷村は「病気が肉体の一部である」ようであるため、人並みに仕事できないだけでなく、素子と結ばれた時、死を感じていた。

「夜の遊びに、素子は遊びに専念する無反省な娘のやうに、全身的で、没我的であつた。素子の貪慾をみたし得るものは谷村の「すべて」であつた。

（略）
谷村は人並の労働の五分の一にも堪へ得ないわが痩せた肉体に就て考へる。その肉体が一人の女の健康な愛慾をみたし得てゐることの不思議さに就て考へる。あはれとはこのやうなものであらうと谷村は思つた。たとへば、自ら徐々に燃えつゝある蝋燭はやがてその火の消ゆるとき自ら絶ゆるのであるが、谷村の生命の火も徐々に燃え、素子の貪りなつかしむ愛撫のうちに、やがて自ら絶ゆるときが訪れる。」[5]（「女体」）

しかし、岡本と仁科は谷村と違い、二人とも人並みに健康な肉体を持つと同時に、谷村がまだ生きている間に素子に対して肉体的な幻想を持っていた。結局、岡本と仁科への嫉妬および素子の肉欲に満たすことから感じた疲労で、谷村は肉体的な恋を捨てるに至った。「女体」の中で谷村の「俺は恋がしてみたい。肉体といふものを忘れて、たゞ魂だけの。」との思いは谷村の敗北の声明と言える。自分のどうしようもない肉体的な弱さに敗北したとでも言える。そして、後篇である「恋をしに行く」は、魂だけの恋のために主人公の信子を口説くことを中心に物語っている。信子に口説き、信子との恋を通じて肉体のない恋をするのは谷村の「逃亡」であるが、このように逃げている谷村は何を表象しているのだろう。

2、アメリカへのコンプレックス

谷村は肉体的な脆弱から感じた敗北で、結局肉体から逃避しようとした。ここで肉体的に苦悶した谷村には、「去勢」された男のイメージが与えられている。1945年8月15日、天皇の「終戦の詔書」に従い、15年間を続けた戦争は日本の敗北で終わった。そして、日本はアメリカが主導するGHQに占領された。占領によって、日本人は日本人としてのほこりが剥奪された。

「占領とは、領土の占領であると同時に＜女の占領＞でもある。国力なるものが領土とともに人口によって支えられるかぎり、再生産を直接になう＜女の占領＞は敵国への決定的な打撃となる。それは象徴的な意味をもつ。勝者の男たちにとって、敗者の＜女の占領＞は勝利の確認でもあるのだ。だからこそ敗者の男たちにとって、勝者になびく自国の女は屈辱を再生産する耐え難い存在となる。」[6]

男性成員を主として構成された占領者集団と被占領者支配層において、勝者として勝利の確認は敗者の女への占領による一方、敗者として敗北の確認

は自国の女が占領されることによる。＜女の占領＞を象徴するものとして「特殊慰安施設協会」および大量の占領軍による強姦事件が挙げられる。敗者としての日本人男性は、慰安施設の設立と強姦に受けたショックから考えると加納氏の指摘は合理的であろう。

谷村の肉体的な敗北が象徴するように、占領による精神的なショックの中で、最初に日本人男性に敗北感を深めたのは「特殊慰安施設協会」だと考えられるだろう。日本政府は大和撫子の純潔を守るために占領軍対象の売春施設「特殊慰安施設協会」（RAA）を内務省警保局長名で設置することを決めた。この国策として出発したRAAは、1945年8月に設立され、1946年2月20日の公娼制度関係法規を廃止することによって、3月27日をもって閉鎖された。しかし、その影響は大きかった。

> 「最盛時には約七万人いたRAAも、閉鎖時には五万五千人。彼女たちは、RAA解散と共に、ある人は街娼に、ある人は赤線に、そしてある人は基地周辺のパンパンとよばれる売春婦に姿を変えていった。」[7]

公娼制度が廃止された後、特定の指定地域内部での売春は認められ、合法的であり、その地域は「赤線地帯」と呼ばれた。それに対して、売春が許可されず、非合法的な地域は「青線地帯」と呼ばれた。「赤線地域で働く女性たちには性病検査費用や病気・入院・中絶費用を積み立てる互助組織、白菊会があった。」[8] しかし、青線地域で働く女性はその待遇がなかったため、警視庁は定期的に「パンパン狩り」を実施し、検挙された女性に強制的に性病検査を付けさせた。1957年「売春防止法」の施行に従い、青線は1957年に、赤線は1958年に廃止された。

上述した無視しえない人数で支えられていたRAAは、連合国軍のためだけに特別慰安を提供するが、日本人の立ち入りが禁止されていた。慰安施設は、日本政府が占領軍という圧倒的な優位にある男性集団に対抗するための産物である。一般女性を連合国軍の性的暴力から守るためにRAAには敗戦国の男性の姿が凝縮している。また、米軍上陸後、米軍が犯した繰り返された強姦事件が、ほとんど不起訴で終わったことも、勝者と敗者の問題である。

> 「日本男性が占領を屈辱と見なすのは、女性身体、ひいては彼ら自身のセクシュアリティへの統制力を喪失したからである。」[9]

「女体」における谷村の肉体的な恋への放棄は、自分のセクシュアリティへの統制力の喪失と理解してもいいだろう。谷村の病弱は、敗戦後の、占領軍という優位性にあった男性集団に対する無力感、劣勢性を表象する。

また、竹内靖雄は、GHQに占領された日本の、過去の自己否定を「精神的去勢」という。

> 「敗れた日本は戦勝国の手に捕えられ、つまり占領下におかれ、過去の自分のあり方を全面的に否定されるという「精神的去勢」を施された。その結果、日本は罪の意識あるいは負い目、劣等感あるいは自信喪失、自己嫌悪あるいは自己の一部に対する自虐的攻撃、他者の声を自分の内部に聴いて行動しようとする分裂病的傾向等々、敗者に特有の態度を身につけるに至った。」[10]（傍線引用者）

谷村の敗北には「精神的去勢」が投影されている。GHQは日本が再び世界の脅威になることを防ぐために一連の改革を実施した。1945年12月8日から12月17日の間で、GHQは日本軍の侵略戦争の残虐行為を記す「太平洋戦争史」を新聞に連載するように命じたことによって、日本人に自分が悪劣な存在であることを自覚させた。そして、12月15日に、国家神道を全否定する指令をだした。これで、日本人がいままで信じていた思想、精神は転覆された。すべての価値観が疑われ、「一億総懺悔」の中で、戦争に負けた日本人が精神的に受けた打撃は酷かった。続いて、1947年、日本はアメリカ主導の下で作られた「日本国憲法」を施行した。憲法第九条には戦争放棄が歌われていた。

「恋をしに行く」では、谷村が信子に媚びる様子は全篇に貫かれていて、信子の優勢な立場は作品全篇を一貫している。谷村が信子に口説くときこのように言った。

> 「僕は信ちやんに愛されたいといふことよりも、信ちやんを愛したいのだ。信ちやんが僕の絶対であるやうになりたいのだ。さうする力が信ちやんには有るやうな気がする。そして、信ちやんがさうしてくれることを熱願するのだ。信ちやんが死ねといへば死ぬことができるやうに、とことんまで迷ひたい。恋ひこがれたい。信ちやんのために、他の一切をすてゝ顧みない力が宿つて欲しいのだ。僕はすこしムキになりすぎてゐるやうだ。つまり僕の心がムキでないから、ムキな言葉を使ふのさ。僕は肉体力が弱すぎるから、燃えるやうな魂だけを感じたい。肉体よりも、もつと強烈な主人が欲しい」[11]（「恋をしに行く」）傍線引用者

精神的な恋、精神的な主人を求めることで心の安堵になることは、敗戦後、天皇が神から人間に降ろされたときの、日本人の打ちひしがれていた強い虚脱感を示唆する。

さらに、谷村は素子に対して葛藤を持っている。素子は「一年に幾たびかある谷村の病気のときは、素子は数日の徹夜を厭はず看病に献身した」、「夜の遊びに、素子は遊びに専念する無反省な娘のやうに、全身的で、没我的であつた」という両面性を持っている。谷村にとって、献身的に看病した「素子ほどいたはり深い親友はなかつた」と同時に、「谷村は咒ひつゝ素子の情慾に惹かれざるを得なかつた。憎みつつその魅力に惑ふわが身を悲しと思つた」。献身的な素子と情欲的な素子に対して、谷村は感動と憎さを持ち合わせている。谷村は素子に対する言えようもない葛藤は、アメリカへの葛藤を象徴するものである。

占領下において、アメリカは日本を軍事的に精神的に「去勢」したと同時に、日本を救ったのである。戦争末期から日本はすでに食糧問題が酷くなる一方であるが、終戦前にアメリカによる空襲で、終戦の時、日本の大都市は焼け野原の状態になっていた。物資難、食糧難の日本に食糧、物資を提供したアメリカは、さらに民主主義改革を行った。

憲法の「強制」性と国民の民主的改革への期待、アメリカに対するコンプレックス、畏怖と憧れは安吾の「女体」の中で谷村の素子に対する葛藤と化したのではないか。谷村の岡村と仁科への嫉妬、素子に対する葛藤、肉体的な恋からの逃避は戦後、日本人の去勢のトラウマを示唆している。安吾の遠慮であろうが、「女体」の中にアメリカのことを言及していない。その基底に置かれたのは、アメリカへの葛藤、自分のどうしようもない無力さへの自覚である。

二、女性に対する敗北感

安吾は終戦直後淫乱な女性を主人公とする作品（「外套と青空」1946.7、「女体」1946.9、「戦争と一人の女」1946.10、「続戦争と一人の女」1946.11、「恋をしに行く」1947.1、「私は海をだきしめていたい」1947.1、「青鬼の褌を洗う女」1947.10）を数少なく描いたほか、1947年1月に短編小説「道鏡」を発表した。「道鏡」は「日本史に女性時代ともいふべき一時期があった」で全文が展開される。安吾は女性作家が主流となり、女流文学が栄えた平安時代

を「女性時代」と名付けようとするではなく、大化改新後、皇室が実権を握るようになってからの、持統天皇から女帝頻出した一時期を女性時代であると主張した。安吾の理由としては、平安時代は「愛慾がその本能から情操へ高められて遊ばれ、生活されてゐた」が、あくまでも平安時代の女性の本能の表れである。

> 「男女各々その処を得て、自由な心情を述べ歌ひ得た時代であり、歪められるところなく、人間の本然の姿がもとめられ、開発せられ、生活せられてゐたゞけのことなのである。特に女性時代といふことはできない。」[12]（「道鏡」傍線引用者）

それに対して、持統天皇から幼少な皇子[13]を育て、天皇家を守るために女帝が相次ぎ即位したという事実がある。女帝たちには支配的権力があった。

> 「女帝達の意志のうちに、日本の政治、日本の支配、いはゞ天皇家の勢力は遅滞なく進行してゐた。大宝、養老の律令がでた。風土記も、古事記も、書紀もあまれた。奈良の遷都も行はれた。貨幣も鋳造された。」[14]（「道鏡」）

女帝たちの結実である聖武天皇までは「天皇家の日本支配は女帝によってその意志が持続せられた」[15]、そして聖武天皇を経て、女帝たちの意志はさらに女帝孝謙天皇に昇華される。これこそ安吾が言った「女性政治」「女性時代」である。簡単に言えば、安吾が言った女性時代は女性が権力を握る時代であり、女性が一家の主人たる時代ともいえる。

「女体」と「道鏡」の関係について、安楽良弘は

> 「「道鏡」が、ほぼ「女体」と並行する形で書かれたということは、当然「女体」の主題が「道鏡」の上にも投影されているとみなければならない。すなわち、「女体」には肉体と精神の葛藤がもたらすものとして、肉体のみを観念化しようとする思念があるが、それがそのまま「道鏡」にも投影されているのである」[16]

と評している。筆者は「女体」の主題が「道鏡」の上に投影されていることを肯定するが、ただしその主題は女性が実権を握る時代という「女性時代」ではないかと考えている。

「女体」の中で、素子が谷村の一つ年下だけなのに、谷村と素子の夫婦生活から谷村は肉体の衰亡を感じた。

> 「素子の皮膚はたるみを見せず、その光沢は失はれず、ねつちりと充実し

た肉感が冷めたくこもりすぎて感じられた。谷村はそれを意識するたびに、必ずわが身を対比する。痩せて、ひからびて、骨に皮をかぶせたやうな白々とした肉体を。その体内には、日毎の衰亡を感じることができるやうな悲しい心が棲んでゐた。」[17]

谷村が素子に対する肉体的な衰亡は谷村の素子の前での精神的な衰亡、あるいは「死」を示唆する。作品の結末で谷村は魂だけの恋をしたいことで作品を収束したのは、谷村が最終的に素子に敗北したからではないか。続編「恋をしに行く」において、谷村は肉体のない恋を求めるためにしつこく信子に媚びたことも、谷村の貧相が表れた。谷村が信子に口説く時、いつも一方的に長くしゃべているが、信子が告白された反応はなかった。

「「僕はね、恋を打ちあけに来たのだよ、信ちやんに。恋といふものではないかも知れない。なぜなら、僕の胸は一向にときめいてもゐないのだからさ。僕はね、景色に恋がしたいのだ。信ちやんといふ美しい風景にね。僕は夢自体を生きたい。信ちやんの言葉だの、信ちやんの目だの、信ちやんの心だの、そんなものをいつぱいにつめた袋みたいなものに、僕自身がなりたいのだ。袋ごと燃えてしまひたい。信ちやん自身の袋の中に僕が入れてもらへるかどうか知らないけれども、僕は信ちやんを追ひかけたいのだ。この恋は僕の信仰なのだ。僕が熱望してゐることは殉教したいといふことだ」
谷村は言葉が大袈裟になりすぎたので苦笑した。
信子は放心してゐるやうな様子なのである。目をつぶつた。何もきいてゐないやうな顔でもあるし、うつとりしてゐるやうでもあつた。」[18]（「恋をしに行く」）

谷村の口説き方は谷村の一方的な感情を押し付けた感じで、信子はあまり気にしなかった。「女体」も「恋をしに行く」も女性は上位にあり、男性は下位にある、というイメージがする。この意味で、「女体」と「道鏡」は通じると言える。

なぜ1947年前後、安吾が女性強の時代に引かれたか、は偶然ではないと考えられる。1947年に実施された新憲法第十四条第一項は「すべて国民は法の下に平等であって人種、信条、性別、社会的身分又は門地により政治的経済的又は社会的関係において差別されない」とある。男女平等の項目により、女性が解放され、選挙権さえ認められ、そして、1946年4月10日に選挙が実施された。投票権さえ取得した女性は無能力者から能力者に転身した。マッ

カーサーは戦後日本の男女平等を積極的に推進した。1946年6月20日午後マッカーサー元帥は39名の婦人議員と非公式に会見したとき、以下のように婦人を激励した。

> 「日本の婦人は政界消息筋が最大限に下した予想をはるかに越えて政治、経済および社会的問題にたいする関心を増大させているが、これは民主主義的思想の強力な呼びかけと熱意によるものである、(中略) 更に日本の婦人はこうしたこれまで以上の責任に応ずるため完全な能力をもっていることを既に明瞭に実証している、社会における婦人の力が漸進的ではあるが、確実に増大している事実は文明における一つの重大な流れである」[19]

参政権だけではなく、民法改正によって家制度が廃止され (1947.12)、教育基本法の制定によって男女平等教育が始まり (1947.3)、労働基準法の施行によって男女同一賃金が原則となった (1947.4) (現実では、男女同一賃金の原則に従わずに、女性の待遇は男性より安いところは珍しいことではないが、法律として定められたのは大きな進歩である)。このような新情勢の下で、女性は政治権力、教育、社会などの各方面にわたって男性と同様な権利が法的に確保された。

女性の能力が認められ、女性の権利が法的に確保されることは、明治民法下に置かれていた男性にとって、女性への敗北になる。これは「女体」を代表とする安吾の作品に女性が男性より上位にいる原因であると同時に、男性にとっての潜在的圧迫でもある。

終戦直後、死んだと思っていた兵隊が生きて復員したことに関して、遺族は嬉しいが、すでに再婚した妻は失望することもあった。また、日本人は引揚げ者に対して敵意を示し、世間からのけ者のように扱われたことも少なくなかった。

> 「非常に多数の元陸海軍人にとって最もショックだったのは、苦労して故国に帰った末に、まるで世間からののけ者のように扱われたことであった。一九四六には、引揚げ者が洪水のように帰国していたが、そのころまでには、連合国の捕虜たちに対してだけでなく、中国で、東南アジアで、そしてフィリピンで、皇軍が衝撃的なほどの残虐行為をはたらいたという情報が、本土の人々の耳にも次々と流れ込んでいた。その結果、元軍人たちは武運つたなく軍人の使命が果たせなかった人たちであるだけでなく、きっと口には出せないような行為をした人間なのだとみなされる場合が多数あった。」[20]

さらに、引揚者が社会に「溶け込む」ことは容易なことではなかった。1945年10月31日の『朝日新聞』（東京朝刊）に「復員者の声」という記事を載った。

「しかるに世間には自分たち復員者の優先的就職について論難する者がある。しかし自分たち復員軍人は一般離職者と違う。自分たちは数年間も国外の戦野に転々と戦って来た者である。銃後の人々と違って自分たちには現下の社会の情勢が全くわからないのである。戦前とは全く変わってしまった祖国に帰還して、ポツンと社会に放り出された自分たちは全く盲人も同様である。」（引用は、旧字旧仮名を新字新仮名にした。）

以上の記事から復員後の生活はかなり大変であった復員者もいたことが分かる。

男たちは、意気消沈し、失望落胆していた時、女たちはいきいきとした生命力を咲いた。「女体」の中で、谷村と岡本とは生活手段がなく、谷村が親から譲りうけた財産で生活しており、岡本の生活は谷村夫妻にたよる。生活のために働いて稼ぐべき男は「女体」において「無能力者」になってしまった。このことは戦後の象徴の一つとしては売春婦、パンパン・ガールを思い出させる。終戦後、「日本が、戦後最初に稼いだドルは売春によった」[21]ことは、「女体」の中の「無能力者」たちの姿と相対化する。その相対化されたイメージはまた田村泰次郎の「肉体の門」（1947.3）を思い出させる。「肉体の門」は有楽町の廃墟を舞台に、自らの体を商売の道具として生きている街娼たちの物語である。作品の中で作者は彼女たちのことを「獣」と称する。

「彼女たちは廃都の獣である。彼女たちは地下の洞窟で眠り、喰らい、野天でまじわる。そのまだ青い巴杏のような肉体は、なにものをも恐れない。むごたらしく、強い闘いの意慾だけがあふれている。」[22]（『肉体の門』）

「獣」としての女性と「獲物」としての男性の構図は、「女体」における元気な素子と衰弱な谷村、そして、肉体的に生きる女と無能力者の男の構図とは、女性の「淫蕩」さと女性が主導な立場にあるという点において相似する。田村泰次郎の「肉体の門」における「獣」について、塚田幸光はこのように指摘している。

「「廃都の獣」とは、戦後の日本女性たちの「反逆」を暗示する。（中略）有楽町という「戦場」に巣くう獣たちに、反逆のアクションを託している

のは明らかだ。女性たちの反逆。それは、脆弱な日本／男を喰らう獣性の目覚めであり、かつての軍国主義批判であり、占領期という「現在」に対する呪詛である。」[23]

過去の軍国主義への批判であろうと、占領期への呪詛であろうと、彼女たちは敗戦の副産物であると同時に、民主主義がもたらした「解放」の結果でもあろう。敗戦後に極度に自信を無くした世相の中で、女性は男以上に心強く戦後を生きようとすることの原動力はここにあるのではないか。

「敗戦による旧秩序の崩壊は、如実に人々の生活に出ていた。古いモラルへの挑戦が、若者の、親への態度に表われる。女性にもかつてない強さが生まれている。夫を失ったり、戦地から帰らぬ留守を守って生きぬいていかねばならなかった女性たち。家族を抱えて、経済的な独立を強いられる。または新しい時代に飲まれて意気を失った夫を励ましながらたけの子生活から生きのびてきた女性。彼女たちは徐々に、自分の行動力に自信を得ていった。」[24]

ここまでくると、谷村が素子から感じた肉体の衰亡に象徴する「死」は、男の特権の「死」、旧制度との切断である。「女体」の中で「素子とは何者であるか？」「そして、女とは？」という設問がある。

「素子とは何者であるか？　谷村の答へはたゞ一つ、素子は女であつた。そして、女とは？ 谷村にはすべての女がたゞ一つにしか見えなかつた。女とは、思考する肉体であり、そして又、肉体なき何者かの思考であつた。この二つは同時に存し、そして全くつながりがなかつた。つきせぬ魅力がそこにあり、つきせぬ憎しみもそこにかゝつてゐるのだと谷村は思つた。」[25]

女の正体を探求することは、男の正体への疑問から由来した疑問であり、女との比較対照下での自問である。この設問は谷村の自問であると同時に、戦後日本の男の「特権」が失われた時の困惑、敗戦のショックで価値観が再評価される気運の中での混迷と理解することもできる。家父長制下で一家の主人として存在し、国家に貢献するための男は、法的に女と平等化された時、谷村のように自失状態に陥ってしまったではないか。

谷村の妻である素子であろうと、谷村が告白しようとする信子であろうと、「淫蕩」という共通点がある。「恋をしに行く」の中で、信子が「生まれつきの高等淫売」で、無貞操な妖婦と知った谷村は、それを口説きがいとして信子に迷わされ、殺されたいと思っていた。「淫蕩」という終戦直後に安吾の作

品のなかでよく登場する女性像には、慰安婦とパンパンガールが投影されていると想像されるが、根底には「解放」の思想が流されているのではないか。「売春婦は、被占領国日本の屈辱であると同時に、過去をたち切られたところで開き直って生きる「解放」の象徴的な存在でもあった。」[26] と言ったように、五十嵐恵邦は田村泰次郎の肉体文学について以下のように述べている。

> 「身体を「思想」の絶対的な対立物とする田村の立場は、安易なものにみえるが、彼は、戦争のために日本人を動員した思想と、日本の敗戦を隠蔽した思想の両者に対抗するために、身体の直接性を特権化したのである。
> 田村にとって、身体は、歴史を正しく理解するための基礎であり、思想家や作家が戦時中についた「ウソ」は、身体によって粉砕されねばならない。」[27]

上の引用の前提は「解放」である。身体は「解放」された時のみ、思想を粉砕しうる、思想の対立物となり得る。占領は女性解放のきっかけになるが、パンパンガールが生まれた土壌でもなる。女性解放という表象を安吾は売春婦というテーマにうまく織り込んだと言えるだろう。

「解放」は、戦後アメリカの占領による政治改革、社会改革がもたらしたものである。女性の肉体的な解放を描く作品が人気を博しえたのは、終戦後の急激な変貌という時代背景が重要な要素である。このことは明治時代に流行していた「毒婦物」を連想させられる。淫乱、詐欺、陰謀などの悪行為をなした、「毒婦」と呼ばれた女性たちは、明治時代の作品に登場し、人気を集めたのも、大変動という時代背景にあったのではないか。野口武彦は「毒婦物」が流行していた時代背景についてこのように述べている。

> 「久保田彦作や仮名垣魯文が、維新変革の前と後とを生きた最後の戯作者だったからということもあるだろう。しかし、それ以上に、そうした戯作者の本能が吸収し、反映した時代の空気のうちに政体の変化などしょせんは遠い出来事であるような粘着した成分、毒婦造型の想像力の養分ともいうべきものが低徊した。開化の東京文明は、幕末頽唐期とまさに地続きであった。そしてそのような「伝統」を背景にしてこそ、それら最後の戯作者たちは開化の毒婦を描くことができた。」[28]

終戦後の肉体文学であろうと、明治時代の毒婦物であろうと、大変動の時代という点では共通している。文学作品の中の女性像の異状には時代の激変が隠れているように、安吾は女性像を描くことで改革、解放を描こうとする

ではないか。

安吾は「パンパンガール」（1947.10）の中で、パンパンガールについてこのように述べている。

> 「然しパンパン諸嬢は元は女学校の優等生だが、自然人への変化と同時に知性の方も原始人的退化をとげて、自然人たることに知性の裏附けを与へ、知性人たる自然人に生育してゐる「愛すべき人」は一人もゐないやうである。彼女らが知性人としての自然人となるとき、日本は真に文化国となるのであらう。パンパンは一国の文化のシムボルである。」[29]（「パンパンガール」）傍線引用者

「知性人」、「自然人」とは、民主主義時代の、解放された人間ではないか。パンパンガールの身体が解放された度合は、民主化の段階を象徴する。この意味で、「女体」において、女性の変化には日本の近代化へのプロセスが表れている。

終りに

「女体」における谷村内部に受けた圧倒的な弱さへの自認はアメリカに対するだけではなく、日本女性にも対する日本男性の敗北した姿である。作品における女性が男性に対して優位にあるのは終戦直後の一連の民主改革による変調の表象である。作品の中で淫蕩な女性を主人公とする理由の一つは、安吾が女性の自由、勝利こそ日本の近代化と繋がっていると言おうとするではないか。

注：

1 花田俊典「＜健康な肉体＞の発見―坂口安吾「女体」から「恋をしに行く」へ」、『語文研究』、52.53 号（1982 年 6 月）、166 頁。

2 坂口安吾『坂口安吾全集 04』、東京：筑摩書房、1998 年 5 月、120 頁。

3 同著、121–122 頁。

4 同著、136–137 頁。

5 同著、123 頁。

6 加納実紀代『戦後史とジェンダー』、東京：インパクト出版会、122 頁。

7 井上節子『占領軍慰安所―国家による売春施設―』、東京：新評論、1995 年 8 月、34 頁。

8 恵泉女学園大学平和文化研究所・編、『占領と性―政策・実態・表象』、東京：イン

パクト出版、2007 年 5 月、73 頁。

[9] マイク・モラスキ―著・鈴木直子訳『占領の記憶 / 記憶の占領』、東京：青土社、2006 年、255 頁。

[10] 竹内靖雄『父性なき国家・日本の活路』、京都：PHP 研究所、1981 年 2 月、84 頁。

[11] 坂口安吾『坂口安吾全集 04』、東京：筑摩書房、1998 年 5 月、292 頁。

[12] 同著、337 頁。

[13] 天武天皇→草壁皇太子→文武天皇→聖武天皇の順番であったが、天武天皇が亡くなった後、後継者がみんな幼少であった。草壁皇太子が幼少のため、皇太后が摂政した。文武天皇が幼少のため、皇太后が即位して持統天皇となった。文武天皇がなくなった時、聖武天皇が幼少であるため、文武天皇の母と長女が相次ぎ即位して元明天皇と元正天皇となった。

[14] 坂口安吾『坂口安吾全集 04』、東京：筑摩書房、1998 年 5 月、340 頁。

[15] 同著、338 頁。

[16] 安楽良弘「『道鏡』」、『国文学　解釈と鑑賞』、58（2）（1993 年 2 月）、118 頁。

[17] 坂口安吾『坂口安吾全集 04』、東京：筑摩書房、1998 年 5 月、130 頁。

[18] 同著：291 頁。

[19] 「婦人議員三十九名マ元帥を訪問」『読売報知新聞』1946 年 6 月 21 日→市川房枝編集・解説、『日本婦人問題資料集成　第二巻政治』、東京：ドメス出版、1981 年 11 月、640 頁。

[20] ジョン・ダワー著、三浦陽一・高杉忠明訳『増補版　敗北を抱きしめて（上）』、東京：岩波書店、2004 年 2 月、53 頁。

[21] ドウス昌代『敗者の贈物』、東京：講談社、1979 年 7 月、67 頁。

[22] 田村泰次郎『田村泰次郎選集 3』、東京：日本図書センター、2005 年 4 月、31 頁。

[23] 塚田幸光「「性」を＜縛る＞　－ GHQ、検閲、田村泰次郎「肉体の門」－」、『関西学院大学　先端社会研究所紀要』、11 号（2014 年 3 月）、54 頁。

[24] ドウス昌代『敗者の贈物』、東京：講談社、1979 年 7 月、262 頁。

[25] 坂口安吾『坂口安吾全集 04』、東京：筑摩書房、1998 年 5 月、125 頁。

[26] 中村政則ら編『戦後思想と社会意識』、東京：岩波書店、2005 年 7 月、247-248 頁。

[27] 五十嵐恵邦『敗戦の記憶　－身体・文化・物語　1949 ～ 1970』、東京：中央公論新、2007 年 12 月、91 頁。

[28] 野口武彦「毒婦物の系譜」、『国文学　解釈と教材の研究』21 巻 10 号（1976 年 8 月）、57 頁。

[29] 坂口安吾『坂口安吾全集 05』、東京：筑摩書房、1998 年 6 月、458 頁。